世紀転換期ドイツの都市とガルテン

——近代都市における身近な自然環境の変容——

穂鷹知美

1. はじめに

本論では、ドイツの都市におけるガルテンの在り方の変化について扱った発表内容をまとめながら、改めて考察を加えていきたい。

ドイツ語のガルテンとは、歴史的に都市に存在する造園的手法で人為的に整備された自然環境全般のことであり、日本語では、個人の庭、庭園、菜園、果樹園、農園などの緑地全般を指す。歴史的にはガルテンは、二つの異なる系統のものから成っていた。一つは、有用植物の栽培を目的としないもので、造園師が整備する観賞や遊歩、社交を楽しむ庭園の系列があった。もう一つは、野菜や薬草などの有用植物の生産を目的に、商業園芸師や都市の下層民、また農村の女性たちによって手入れされていたガルテンである。

しかし、一八世紀の終わりから、このようなガルテンの系列に変化がおきてくる。ロマン主義的な自然の愛好が広がっていくと、ガルテンでの作業（園芸）も、自然に触れることで心身を健康にし、心をなごませるものであり、市民的な教養ある行為であるという意識が強くなっていった。園芸という行為自体が高尚なものと捉えられることによって、次第に、二つの伝統的な系統のどちらに属するのか鮮明に分けることが難しい形態のガルテンが増えていく。少なくとも、植物を世話する人にとって、野菜や薬草類などの有用植物と観賞用植物という境界は、以前ほど鮮明に意識されなくなっていった。[1]

一方、都市にあっても、喧騒をはなれて自然に接することができ、かつ家族の親密な絆を大切にすることができる、都市の希少な保養の場というイメージが、ガルテン、特に個人宅の庭において強調されるようになった。単に緑に囲まれる場所へ行きたいのであれば、郊外の森や草原、あるいは近郊に整備され始めた公共緑地があるが、これらの公的な緑地は伝統的に、「見る」「見られる」ということを享受する社交的な空間であったり、市民的な教養や感性を育てることをが目的とされた施設であったりしたため、家族がくつろいでつ

どう居心地のよい場所とはいえなかった。これに対して家庭の庭は、家族だけでくつろげる親密な緑の聖域として理想化されたのである。[2]

しかし実際には、工業化・都市化が進む一九世紀後半のドイツにおいて、庭つき住居の数は、どこの都市でも急速に減少していった。二〇世紀初頭には田園都市構想が注目され、庭つき住宅地区がドイツのいくつかの都市郊外でも実現したが、都市の大多数の人々は、依然として庭つき住居とは無縁の生活をおくっていた。都市内部や周辺にあった森林や草原地帯も、都市の拡大化とともに、次々と姿を消していった。一方、ガルテン（庭）を、心身の疲れをいやし、家族との絆を保つ場として神聖視する見方は、上層市民層だけでなく、都市の全社会層に広く受け入れられていった。[3]

このような状況下、公共緑地とクラインガルテン施設[4]という新しいガルテンの形態が発達していった。本論では、一九世紀から二〇世紀にかけての世紀転換期におけるこの二つの新しいガルテンの形に焦点をあて、近代ドイツにおける日常生活と自然環境との関わりについて考察してみたい。

一九八〇年代からドイツでは歴史研究の主要テーマとして自然環境や環境問題全般を扱う「環境史」と呼ばれる研究分野が開拓されてきた。近年の自然環境に関する研究[5]では、特にドイツ「特有の」歴史的文脈のなかで自然環境とのかかわりについて注目する研究が増えている。[6]

しかし、これらの研究では、日常生活におけるガルテンの問題について、ほとんど扱ってこなかった。この主たる要因として、すでに緑地史（造園史）研究という枠組みで、ガルテンの変容・発達について一九七〇年代以降研究が進んでいたことがあげられる。これによって、ガルテンを扱う研究は緑地史で、それ以外の環境の問題を扱うのが歴史研究としての環境史という、学問分野上、ある種の住み分けが暗黙裡にできあがっていた。[7] ただし、これまでの緑地史の研究でも、公共緑地を対象にした具体的な造形の分析や設置構想・経緯の解明が中心であり、クラインガルテン施設など小規模なガルテンを含め、ガルテンが実際に都市空間でどのような機能をもっていたのかについて、踏み込んだ考察はほとんどみられない。[8]

しかし、自然と人の生活の営み、特に身近な日常生活における自然環境との接し方を明らかにするという意味で、近代都市空間における最も身近な自然環境の一形態といえるガルテンの在り方は、看過できない重要な研究対象であろう。今回のシンポジウムでの共通の論点として提示された「里山的環境」を、一定の共同体が長期的に維持・利用する、生活に身近な自然環境と理解すると、ドイツのガルテンと里山的環境の歴史的な形成や在り方には、共通する問題も少なからず含まれていると考えられる。

2. 世紀転換期の公共緑地改革

一九世紀、工業化や都市の拡大化が急速に進むドイツの都市では、いくつかの要因で、市当局によって公共緑地が設置されるようになった。まず、一八世紀から一九世紀前半において、造園術（園芸）は、単なる庭園を整備する手法としてだけではなく、都市の美化の手段としても高く評価され、公共建造物と並び、都市の豊かさや威信を象徴する施設の一つとして、公共緑地の設置に力がいれられる

ようになった。[9]

また、都市住民の散歩の場の需要が高まったことも、大きな要因であった。美的で感傷的な自然の愛好が広がった結果、自然環境を観賞しながら散歩し、さらに散歩者同士の社交を楽しむ場として、風景式庭園の様式の公共緑地の整備が各地で進んだ。散歩を通して自然に触れることは、教養ある市民的行動であり、同時に、心身の緊張や疲労を取り除き、健康を維持するために不可欠なものとみなされていた。[10] さらに、一九世紀半ばから大・中都市の生活環境が急速に悪化していくようになると、上下水道の設置や建築の規制に並行して、オープンスペースの確保や公共緑地の整備が、都市の衛生改革の一端として推進されるようになった。

このように公に開かれた緑地の整備は進んでいったが、これらの公共緑地にはいくつかの問題があった。まず、これらの公共緑地が伝統的な風景式庭園の様式を重視した芸術至上主義的な形状で、散歩と観想以外の利用法を念頭においていなかった。[11] さらに利用の仕方は、個々の公共緑地の規定で細かく規制されていた。規定には、芝生に入ることや喫煙を厳しく禁じるだけでなく、所定のベンチ以外に腰掛けることや乳母車の入場を禁止するものもあった。[12] これらの規定が正しく守られているか、公共緑地内をみまわる警備員によって、常に監視されていた。

また、運動のためのスペースがほとんどないことも問題であった。フランス、イギリス、ハンガリーなど他国に比べても、ドイツの運動場の数は特に少なく、[13] 一八八〇年の時点で一〇〇万人以上の人口を抱えるベルリンにおいても、運動場は五ヵ所しかなかった。[14]「子供たちが遊べるような大きな緑地はほとんどなく、どこかの広場で遊ぼうとすると、政治的な受刑者のように扱われる」[15]といわれるような状況であった。

そもそも、体を動かす運動という行為は、風景式庭園型の公共緑地で配慮されなかったというより、長い間、規制の対象であった。[16] しかし、規制の対象とする見方は、一九世紀のはじめからあったのではない。むしろ、一九世紀のはじめ、プロイセンをはじめとするドイツ諸国がナポレオン軍と戦ったころは、トゥルネン、日本語で体操に当たる運動行為は、国を守るために必須な体の鍛錬に重要であるとされ、国によって奨励されていた。特に、一八一一年、ヤーンがベルリンで体操場を設置して以降、体操が愛国的な熱狂と混ざり合いながら、強い人気を得るようになり、体操協会の設立が進んだ。

しかし、ナポレオンが去って秩序が回復してくると、体制側にとって体操を行う熱狂的な人々は危険な存在とみられるようになった。プロイセンでは、一八一九年から一八二〇年にかけて、八四の公共体操場が閉鎖あるいは破壊された。その後も同様の理由で、長い間、民衆の運動に対して否定的な態度がとられ続けた。

しかし、一八四〇年代からは、次第に民衆の運動を肯定的に捉えるように、体制側の態度に変化があらわれてきた。まず、プロイセンでは一八四二年に体操の授業、つまり体育が、学校の教科として導入されるようになった。同じ頃から、体操協会が再び市民層の間でつくられるようになっていく。特に一八六〇年代からは、体操協会やスポーツのための結社活動が活発化し、労働者も参加するようになった。さらに世紀末ごろから労働者の就労時間が短縮され、日

曜が休日として定着するようになると、サッカーなどのスポーツが、全社会層の間で人気を博すようになった。

このような状況下、それまでの美的、教育的な視点に偏重し、運動場など、ほかの利用法をほとんど考慮していない公共緑地施設の在り方に対する批判が、教育関係者や医師、社会改革推進派市民らを中心に強まっていった。誰もが簡単に立ち寄ることができ、運動場やほかの様々な屋外活動の場が充実した公共緑地は、青少年の心身の健康を促進するため、また、労働者に規律正しい道徳的な生活をおくらせるために、最も効果的な施設の一つとして、高く評価されるようになった。[17] そして、「今日のすべての大都市は、国民の七〇%から八〇%を占める夏の旅行ができない貧民階層に、住まいの近くのフォルクスパルク〔民衆のための公園　筆者注〕と運動場によって休養施設と夏の休暇を手に入れさせる義務を負っている」[18]として、新しい形の公共緑地の設置が、全国の都市自治体に訴えられた。

造園師の間でも、従来の風景式庭園に基づいたデザインを克服し、時代にあった新たなガルテンの形を模索する動きがでてきた。未来のガルテンの在り方を斬新に論じたミッゲ Leberecht Migge の著作『二〇世紀のガルテン文化』にも、そのような姿勢が鮮明に表れている。「民衆は、フォルクスパルクで本当に動きまわれなくてはいけない。そうでなければフォルクスパルクは何の意味もない。寝転び、遊び、踊ったりしたくなる、ただそのためだけにやわらかい緑の草地にし、水浴びをしたり、そのまわりを歩きまわることができるようにするために、河川や湖水が設けられるようになって、はじめてフォルクスパルクといえる。偏って教育され、偏ってかつ機械的に働く都市居住者を、一日の重圧と苦労のあとに、仕事から気分を変えさせて、いわば自分を解放させる機会を与え、いや、機会を与えるだけでなくそうするよう積極的に促すことによってのみ、今日のフォルクスパルクはその本当の課題を果たしたといえる」(傍点は原書のイタリック体)。[19]

この結果、世紀転換期から、従来の公共緑地に代わる新しい公共緑地設置がドイツ各地で計画されるようになった。ちなみに、緑地を広い社会層のための公共緑地とする構想自体は、すでに一八世紀の後半に発表されていた。[20] 特に一七八五年、キール大学で教鞭をとっていた美学者ヒルシュフェルト Christian Cay Laurenz Hirschfeld による『造園理論』という著作の内容は重要である。ヒルシュフェルトは著作のなかで、公共緑地の意義とその在り方について「りっぱな都市であれば、市域に、民衆が、嬉しい時や苦しい時など折にふれて集い、屋外の健康な空気を吸って、天空や風景式の美しさを満喫することができ、のびのびとすごせることができる、大規模な、公に開かれた広場を一つ以上もつべきであり」、「このような広場が、芝生や、噴泉や、装飾円柱で飾られて、樹木や美しい建築物で囲まれるならば、都市のすばらしい誇りとなる」[21]と主張した。またこのような広場以外にも「民衆の散歩のための場所を市門のそばにつくること」も勧めて、これらを民衆（フォルク）のためのガルテン、すなわち「フォルクスガルテン」と呼んでいる。

ヒルシュフェルトのフォルクスガルテン構想は、同時代の造園界や知識人層に強く支持され、[22] 実際にこの著作出版からわずか四年後

の一七八九年に、「エングリッシャー・ガルテン」という名の三七〇ヘクタールもの広さをもつ公共緑地が、ミュンヘン中心部に計画された。ただし、住民全体を対象にした緑地がドイツで全国的にみられるようになるのは、ようやく一九世紀末からである。民衆に開かれた緑地（ガルテン）の重要性の認識が、一〇〇年以上たって、

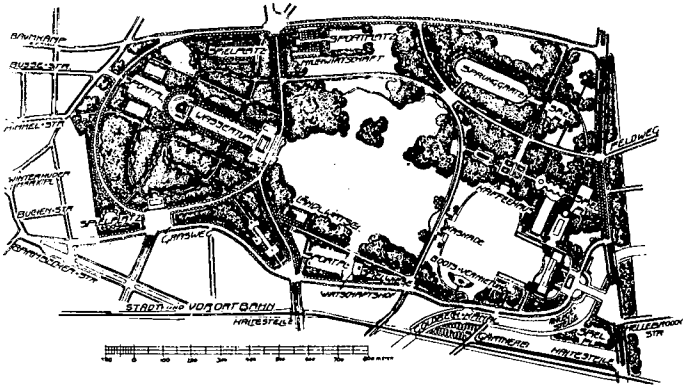

図1　ハンブルク北部郊外ヴィンターフーデのシュタットパルクの公園設計図（1909年）

出典：Richard, Winfried, Vom Naturideal zum Kulturideal. Ideologie und Praxis der Gartenkunst imdeutschen Kaiserreich, Berlin 1984, s. 329.

ようやく地方自治体の緑化行政においても浸透したということになろう。

住民すべてに開かれた大規模な公共緑地の設置にとりわけ熱心であったのは、ベルリンやハンブルク、ケルン、ライプツィヒなど労働者を多く抱える大都市であった。その代表的な例のひとつに、ハンブルク北部の住宅が密集する郊外ヴィンターフーデに一九一四年に開園した、「シュタットパルク」という、文字通り都市公園という名の公園がある。ミッゲもコンペティションの審査員として関わっているこの公園は、一八〇ヘクタールの広大な敷地面積をもち、中心を占めるのは広い草地の運動場であった。これを囲んで子供専用の運動場、スポーツ用の運動場、ボート遊びができる池、食堂、様々な種類の庭園等、多様な施設や建築物が配置され、これらの施設の間には並木道や散歩道がめぐらされていた。家族で休日の一日中を過ごしてもあきることがないほど、多様な利用法が可能となったガルテンであった。

3．クラインガルテン施設の展開

クラインガルテン施設のはじまり

クラインガルテンは直訳すれば「小さな庭」を意味するが、単なる文字通りの小さい庭を全般にさすのではなく、居住する住宅から離れた場所にある小区画の賃貸制園芸用地を指す用語として、一九世紀末以降に定着した言葉である。もともと、クラインガルテンと呼ばれることはなかったにせよ、同種の形態をもつ小区画の園芸用地の集合施設は、一九世紀以前にもドイツのいくつかの都市で存在

していた。都市内につくるスペースがとれなくなった家庭菜園のかわりに市壁の外につくられたり、道徳的で規律ある生活と食糧確保のため、兵士に自ら耕作させる菜園（ガルテン）として設置されたりしたものがそれに当たる。また、近代の都市の工業化や都市拡大化がはじまる一九世紀前半、特に一八三〇年代には、都市の貧民層の貧困からの自力救済を促すことを目指し、国や地方自治体による公営の賃貸制小区画園芸用地施設、通称「貧民菜園」がキールをはじめ、多くの中都市、大都市で設置された。[23]

しかし、クラインガルテン施設がドイツで急増するのは、一九世紀後半、特に世紀転換期であり、それらは貧民菜園のように公的に設置されたものではなく、社会改革推進派の市民層や地域住民がイニシアティヴをとって設置したものであった。一八七〇年にライプツィヒのシュレーバー協会によって最初に設置されたクラインガルテン施設は、この新しい民間型クラインガルテン施設のさきがけで、以後、クラインガルテン施設の理想のモデルとして評価・注目されたもののひとつである。[24]

この協会の名前は、ライプツィヒの整形外科医シュレーバー Daniel Gottlob Moritz Schreber に由来している。彼は、人間の成長に体と心の総合的で調和的な発達が不可欠であり、これを達成するために、「肉体的な健康がとりわけ（大切であり）」、「それこそが心の健康、すなわち明朗さを生み出す」と考えており、[25] 体操や遊戯など身体を動かす運動を奨励する著作を多く執筆し、[26] 一八四五年には、他の医師らとともに、「ライプツィヒ一般体操協会」という体操協会を自ら設立した。また、そのような子供の肉体的な健康を増進するために必要な運動を行える場所が、ほとんどない当時の都市の状況を憂い、屋外の運動場の必要性を世論に訴えた。[27]

このシュレーバーの主張に共鳴したライプツィヒの教育者ハウスシルトは、シュレーバーの死後まもない一八六四年に、教師と父兄に呼びかけて、「シュレーバー協会」を結成し、子供のための運動場の設置に取り組んだ。一八六五年に設置された運動場のまわりには、さらに、やはり教育者でシュレーバー協会会員であったゲゼル Carl Gesell によって、子供のための花壇が設けられるようになった。しかしこれは長続きせず、むしろ親たちが花壇に強い関心をもったため、最終的に一八七〇年、「家族ガルテン」と呼ばれる約一〇〇家族分の賃貸制園芸用地（クラインガルテン）に整備された。[28]

シュレーバー協会は、運動場とクラインガルテンからなるこの複合的な新しいガルテンの形を、自分たちが求める子供の健康な育成のための理想的な施設とみなし、以後、ライプツィヒのほかの都市地域やほかの都市でシュレーバー協会が結成された際も、同様の施設が設置されていった。さらにシュレーバー協会だけでなく、社会改革推進派の市民層やそれぞれの都市の住民によっても、類似するクラインガルテン施設が設置されていくようになった。

シュレーバー協会が最初にクラインガルテン施設を設置したライプツィヒは、ベルリン[29]と並び第一次世界大戦以前にドイツでとりわけクラインガルテン施設の設置がさかんであった都市である。一八九九年、ライプツィヒのクラインガルテン施設総数は一一九ヵ所であり、クラインガルテン数は七七四一にのぼった。一一九ヵ所のうち一ヵ所が市営貧民菜園型クラインガルテン施設で、それ以外はす

べてシュレーバー協会やほかの結社、あるいは個人によって設置されたクラインガルテン施設である。都市で占めるクラインガルテン施設の総面積は、一九一四年には二〇〇ヘクタールにおよび（表1）、森林地帯及び墓地を除いた公共緑地の総面積に迫る広大な面積を占めていた。

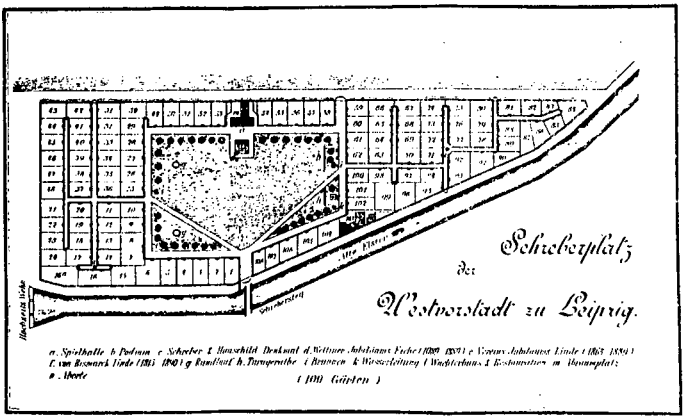

図2　シュレーバー協会によって設置されたクラインガルテン施設例（1876年）（中心にあるのは運動場）

出典：Bähr, Marion, Erziehung zur Lebenstüchtigkeit durch harmonisches Miteinander von Körper und Geist. Zum 125. Jahrestag der Gründung des ersten deutschen Schrebervereins. In: Leipzig. Aus Vergangenheit und Gegenwart. Beiträge zur Stadtgeschichte 7, 1990, S. 67.

以下では、このライプツィヒでのクラインガルテン施設の展開を詳しくみていくことにする。具体的には、クラインガルテン施設のなかでも史料が比較的よく残っている、シュレーバー協会など、結社形態でクラインガルテン施設を運営していた施設についての史料[30]を基に、クラインガルテン施設の目的、構造、活動内容、施設に対する市当局の態度、そしてクラインガルテン施設に集まる会員像を明らかにしていき、クラインガルテン施設という新しいガルテンの形態が都市で担っていた機能について考察していく。

表1　1914年の主要緑地面積

種類	面積（ha）
森林地帯を除く公共緑地	242
森林地帯	732
公園型墓地	130
クラインガルテン施設	200
合　計	1304

出典：Weigel, Paul, Die Großstadt Leipzig, in: Leipzig: Ein Blick in das Wesen und Werden einer deutschen Stadt, 1914, Leipzig, S. 29.

クラインガルテン施設の主な目的

ライプツィヒで第二のシュレーバー協会として発足した南部近郊のシュレーバー協会の規約には、以下のように書かれている。「この協会の目的は、子供の肉体と精神の教育のためにその名を不朽のものとしたシュレーバー博士と、校長のハウスシルト博士の意向にそって、力の及ぶ限り活動することである。この協会は、健康的な環境に、ガルテンに囲まれた形で設置された運動場と、またそこでの適切な遊戯・運動を促進・保護することに

よって、子供の肉体的な健康に配慮する。また、状況が整い次第、夏には会員とその子供たちの親睦を深める集まりと大きな夏祭りを開催する。また、一年を半分に分けて夏期に当たる時期には、可能な限り、園芸作業を通じて、子供たちに、有用でしかも啓発的な作業をする機会を与えるようにする。青少年の精神教育の向上と促進のために、協会では、冬期には可能な限り、毎月、協会の会合を開き、講演や話し合いを通して実践的な教育の問題に取り組むようにする」[31]。初期につくられたシュレーバー協会の規約は、どの都市地域のものも、ほとんどこれと同じであり、肉体的、精神的な青少年教育を最優先目標としていることが特徴である。

しかし時代がくだるにつれて、協会の目的意識には、青少年だけではなく、家族を中心にして家族全体の健康の強化や、余暇の充実などを目指す傾向が次第に強まっていった。一九〇一年に定められたライプツィヒのシュレーバー協会の統一組織「ライプツィヒ・シュレーバー協会連盟」の規約では、「ライプツィヒ・シュレーバー協会連盟は、シュレーバーとハウスシルトの意向にそって、肉体的、精神的な青少年教育や、健康な家族生活を促進することに努める」とうたわれている。また、規約には掲げられていないが、地域住民全般に保養の場を提供し、市域全体に恩恵を与えることも、次第にシュレーバー協会の施設の重要な意義として捉えられるようになっていった[32]。

シュレーバー協会に属さないがクラインガルテン施設を運営する結社（以下、「（非シュレーバー協会系）クラインガルテン設置結社」と記す）においても、救貧は最大の目的ではなく、青少年の健康促進や家族生活の向上こそが、より重要な目標としてうたう規約が多数をしめる[33]。非シュレーバー協会系クラインガルテン設置結社の全国的組織「ドイツ労働者ガルテン及びシュレーバーガルテン中央連盟」が提示した標準的なクラインガルテン設置結社の規約モデルでも、シュレーバーやハウスシルトの意志にならって、クラインガルテンや運動場を設け青少年教育の促進や健全な家族生活を実現することが、結社の目的として明記されている[34]。

一方、非シュレーバー協会系クラインガルテン設置結社では、規約にはなくても、クラインガルテンでの農産物などの有用植物の栽培については、家庭の健康状態を促進し、家計の助けにもなる、と公然と認めている[35]。この点では、教育のためにクラインガルテンを設置し、有用植物を栽培して生計を助けることを否定し、批判する立場を明確にしているシュレーバー協会とは、異なっていた。

市営の貧民救済型クラインガルテン施設の規約についても参考までにみてみると、ここでも、有用植物の栽培を促進することを重視しており、その点では、シュレーバー協会のクラインガルテン施設のスタンスとは、大きく異なっているといえる。しかし、菜園作業の道徳的価値や菜園の整備による環境美化効果を評価し、それを目指そうとした点は、シュレーバー協会と相通ずる点とみることもできよう。ただし、市営のクラインガルテン施設では、青少年の教育については、特に言及されていない[36]。

クラインガルテン施設の構造

具体的な施設の設備としてシュレーバー協会が、少なくとも表向

きに、最も重視するのは運動場であり、どのシュレーバー協会の施設にも設置されていた。運動場の大きさは、一〇〇人の子供に対し運動場の面積は三〇〇〇平方メートルあるのが理想とされていた。[37]

非シュレーバー協会系クラインガルテン設置結社の施設でも、運動場を併設したものが多い。第一次世界大戦後にシュレーバー協会とそれ以外のクラインガルテン設置結社が統一されてできた連盟によって一九二三年に行われた調査では、ライプツィヒとその周辺でこの連盟に加盟している全一三四の協会のうち、運動場をもつ協会は九五協会にのぼっている。[38] 他の都市に比べ、運動場を併設したクラインガルテン施設の割合はライプツィヒではかなり高かった、[39]と当時からいわれている。

労働者の多い地区の結社や、会員に労働者が多い施設でも、運動場の設置に関しては熱心であったようだ。例えば、一九〇一年に設立された東部郊外の労働者が多かった東部郊外のクラインガルテン設置結社「パウツマン＝エドリッヒ」の施設にも一九一二年、七五〇平方メートルの広さの運動場があり、子供の運動に積極的な活動が行われている。[40] 西部郊外の工業地区で、やはり労働者が多いとされるリンデナウのクラインガルテン設置結社「モルゲンレーテ」にも、六〇〇平方メートルの運動場がある。[41] また西南のかなりはずれの郊外に位置し、会員はほとんど労働者だけのクライン・チョヒャーのクラインガルテン設置結社「イマーグリューン」の施設にも、よく整った芝生の運動場がある。[42]

一方、実質的に施設内で最も大きな部分を占めていたのはクラインガルテンである。クラインガルテンの大きさは、平均して五〇から二〇〇平方メートルで、通常、数十のクラインガルテンが並列して設置されていた。

クラインガルテンについての関心の高さは、クラインガルテン数の順調な増加にあらわれているといえよう。市の調査によると、一八九〇年のシュレーバー協会のクラインガルテン総数は一〇九二で、シュレーバー協会連盟に属さないクラインガルテン施設のクラインガルテン総数は八〇七であった。その約一〇年後の一八九九年には、シュレーバー協会のクラインガルテン数は総計二五一四に増加し、シュレーバー協会以外の施設のクラインガルテン総数も四八〇〇余りになっている。

しかし、クラインガルテンの需要は高く、協会の会員であってもクラインガルテンをすぐに保有できることは、ほとんどなかった。施設により若干の違いはみられるが、一九一一年において、シュレーバー協会でクラインガルテンを保有するのは、全会員の約半数にすぎなかった。地域によっては全会員中でガルテンを保有する会員の割合が、二〇％にしかならない結社もあった。[43]

クラインガルテンを保有するには、通常、会費のほかに年間の賃貸料を払う。一平方メートルの賃貸料は一年間で約五ペニヒから一七ペニヒであり、賃貸年数は一年から二五年の間で、特に一〇年から一五年の間が多かった。ちなみに、一九一〇年ごろの一年あたりのクラインガルテン平均賃貸料は、一平方メートル当たり一一・六ペニヒで、二〇〇平方メートルのクラインガルテンの年間賃貸料は約二三マルクであった。

クラインガルテンは、単なる菜園としてではなく、あずまやを設

置するなど趣向をこらし、子供や家族が集い一緒に楽しむのに利用することがよしとされた。最古のシュレーバー協会「西部近郊」では、クラインガルテン内のあずまやは、高さ二・五メートル、九平方メートル以内にするように定められている。[44] しかし、あずまやとはいっても、庭園の一角につくられる美しいあずまやとはほど遠く、小屋という方がふさわしいようなみすぼらしいものも多く、シュレーバー協会では、あずまやをクラインガルテン施設に似つかわしい風貌を備えた見かけのよいものにするよう苦心していた。[45]

ほかに運動場やクラインガルテンと並び、会員が集まる集会所が施設に建設される場合もみられた。一八九六年に建設されたあるシュレーバー協会の集会所では、一、すべての会員の集合場所であり、二、貴重な懇親と本当の休養の場であり、三、友と後援者をもてなす場であるべきであるとされており、[46] 集会所の具体的な間取りなど、詳しい形状についての史料は乏しいが、通常簡単な飲食のできる施設で、会議や懇親など会員同士のコミュニケーションの場として主に利用されていたと考えられる。

このほか、青少年教育に熱心なシュレーバー協会の中には、子供の雨天の遊戯・運動の場として、屋内で運動のできる施設をもつものもあった。

クラインガルテン施設での活動

クラインガルテン施設を運営する結社では、これまでみてきたようなクラインガルテンの賃貸や運動場の開放以外にも、会員や地域住民を動員するさまざまな催しや活動を開催していた。

最もよく開催の記述がみられるのは、ミルク・コロニーと呼ばれる、夏期に子供に牛乳とパンの配給をする活動であった。これは、休暇に行けず、栄養も十分にとることができない貧しい子供たちが、都市にあっても健康を保ち、休暇を享受できるために企画された福祉事業で、シュレーバー協会では、健康状態や家庭環境を考慮して選んだ子供たちに、学校の夏期休暇の四週間、毎日朝八時と午後五時の二回、それぞれ半リットルの温めた全乳とパンを一つ配っていた。[47]

そのほかにも、子供向けのさまざまな活動を企画していた。例えば一九〇六年、シュレーバー協会「オストフォーアシュタット」において遠足は八八回、水泳場訪問は学校の長期休暇を除き週三回、年間で五一回開催された。非シュレーバー協会系クラインガルテン設置結社においても、同様の青少年むけ教育活動や、健康促進活動を行っていたところが圧倒的に多い。[48]

大人や家族向けの催しにも力が入れられていた。クラインガルテン設置結社「デーゼナーヴェーク」の一九〇四年一〇月から一九〇五年九月までの年間行事をみると、創立記念祭、家族の夕べ、バラ展示会、子供祭、園芸展示会などの祭や催しが行われている。[49] ほかにも余暇の行事として、クリスマスの行事や舞踏会、子供遊戯会、映画会など様々な独自の行事を行う結社が多くあった。

シュレーバー協会が開催する年間行事で最も大きいものは、夏に行われる子供祭である。一八八〇年のシュレーバー協会「ヴェストフォーアシュタット」において開催された子供祭には、二〇〇〇人以上の子供が訪れた。子供祭といっても実際には、子供の家族も参

加するため、かなり大規模な祭だった。施設は華やかに飾られ、音楽がいたるところで演奏され、夜には火が焚かれ、提灯がともされた。[50]

ただし、非シュレーバー協会系クラインガルテン設置結社では、シュレーバー協会と異なり、青少年教育行事を常に最優先にするのではなく、会員の生活状況に応じて、活動内容を柔軟に変える場合もあった。会員のほとんどが労働者であった西南郊外のクラインガルテン設置結社「イマーグリューン」では、子供祭は行わず、それによって浮いた費用を失業中の会員への経済的支援にあてている。[51]

このようにライプツィヒのクラインガルテン施設では、会員への園芸や運動の場を提供するだけではなく、多様な活動や催しを開催していた。これらの活動に大勢の住民が参加しており、住民の間で園芸や運動以外にも、福祉や文化的・娯楽的な活動に対する要望が強かったといえるであろう。その一方、私的な施設でありながら、地域の子供たちに開放された運動場を設置し、ほかにも地域全体の福祉や娯楽に結びつく活動を行うようになった背景には、政治的・財政的な事情も絡んでいたと考えられる。

一八九〇年に社会主義者鎮圧法が解除された後、結社や出版の自由は一応保障されるようになったが、[52]ザクセンでは一八九六年より、一八五〇年の結社法が再び施行され、結社活動や集会は厳しい警察の監視下に置かれるようになっていた。例えば集会を行う際には、二四時間以上前に時間、場所、目的を申請し、許可を受けることが必要とされた。さらに警察には、集会に立ち会い、申請と異なる内容や法律に反するとみなされることがなされた場合には、発言者に処罰を加え、集会の解散を命じる権限が認められていた。結社が全国組織化することも禁じられた。一八九八年に結社、集会権に関する新しい条項ができ、状況はいったんは改善されたが、一九〇五年以降再び監視が強化され、存続まで難しくなる結社もでてきた。[53]

このように結社活動が厳しく監視されている時代において、会員だけでなく地域全体に恩恵をもたらす活動を実施することは、市当局から信頼を獲得し、施設の存続を安定化させるための手段としても重要な意味をもっていたであろう。

また、施設を開放し、特別行事で多くの人に飲み物などを販売することは、結社の貴重な財源となっていたとも考えられる。事実、祭などの特別行事で得る収益は、時にはクラインガルテン賃貸料に匹敵するほど大きなものであった。西南部郊外のクラインガルテン設置結社「イマーグリューン」は、市民からも、市からも全く援助を受けていなかったが、一九一〇年の年次報告書の収支決算書をみると、ビールの販売による利益は一二〇〇マルクにのぼり、クラインガルテン賃貸料一四〇〇マルクの次に大きな収入元であった。[54]

市当局の態度

このようなクラインガルテン施設の努力もあってか、市議会での議論をみると、クラインガルテン施設を青少年や貧民層の健康を促進し、家庭的で健康な余暇を提供できる場として支持する姿勢が、当初から圧倒的に強い。[55]一八六五年、シュレーバー協会が最初に運動場をつくる際にも、ライプツィヒ市が土地を賃貸している。クラインガルテン施設を社会民主勢力の拠点として危険視するような見

解は、少なくとも各結社についての文書やクラインガルテン施設関連の市議会議事録には見当たらなかった。

市当局がクラインガルテン施設を奨励する理由として、このようにクラインガルテン施設には社会的な利点があったのと同時に、市にとって財政的な利点があったことも確かである。公共緑地とクラインガルテン施設にかかる市の費用負担を比較すると、公共緑地の設置及び維持のための費用の一切は市が負担しなければならないのに対し、クラインガルテン施設の整備・維持は会員である住民が自ら行うため、市が負担する費用はほとんどなかった。さらに市が所有する空き地を貸し出せば、賃貸料まで得られることが、クラインガルテン施設を支持する理由にもなった。[56]

市当局は、シュレーバー協会施設やほかのクラインガルテン施設に対して、いくつかの具体的な支援や擁護措置も行っていた。まず、市は所有する土地をクラインガルテン施設に賃貸することに積極的であった。一九〇〇年代のライプツィヒにおけるクラインガルテン施設の調査では、六九結社のうち一三結社が、ライプツィヒ市や周辺の地方自治体から土地を賃借している。[57] また、クラインガルテン施設で行われる青少年のための福祉事業に対して、経済的な支援をしていた。青少年の健康な発育促進のためとして、一九〇七年には、ライプツィヒにある全一八シュレーバー協会に対し、一括して四〇〇〇マルクの助成金を支出している。[58] さらに、限定的なものではあったがクラインガルテン施設の存続のための配慮もなされていた。クラインガルテン施設を、公共緑地のように恒常的な施設として都市計画に反映させることこそなかったが、一応その存在を、都市計画をする際にも考慮し、やむなく接収することが決まった際も代替地の提案をするなど、施設の再建にも協力的だった。[59]

市当局のこのようなクラインガルテン施設についての好意的で協力的な態度は、クラインガルテン施設の伸張のための必須条件であったといえよう。

ただし第二帝制期の終わりまで、市当局が設置したクラインガルテン施設は一ヶ所にすぎず、クラインガルテン施設に対する法的な保護もなければ、都市計画で恒常的な施設として認められることもなかった。シュレーバー協会やほかのクラインガルテン設置結社が、「将来どのような発展を遂げるのかわからず、そのため、もしシュレーバーガルテン（クラインガルテン全般を意味していると推測される）が都市計画案に基づいて権利をもつようになれば、後でたいへん不都合なことがおきるかもしれない」という慎重な意見が根強かった。[60] この結果、土地の投機や新たな道路建設によって、数年から数一〇年で立ち退きを迫られるクラインガルテン施設が少なくなかった。

クラインガルテン施設に集まる人々と施設の社会的機能

クラインガルテン施設を支持し、利用していたのはどのような人々であったのだろうか。会員の職業または社会層について史料に記述があった二六結社[61]（一二シュレーバー協会と一四クラインガルテン設置結社）の史料[62]から分析してみる。

まず大きな特徴は、労働者と中間層（新興中間層である下級公務員や職員層が多い）が混在する結社が多かったことである（一四結

社)。これは、同じ活動を行う結社がそれぞれの地域に複数あり、労働者によって構成される結社と、市民層によって構成されるものにはっきりと分離していることが多かったほかの結社[63]とは大きく異なる特徴であった。

そうとはいえ、人数からいえば、クラインガルテン施設の会員総数の圧倒的多数は労働者であった。労働者（貧民層を含む）が会員の半分以上を占める結社は、少なくとも一七結社あり、全会員のなかで労働者の占める割合は、時代が下るにつれて増える傾向がみられる。ただし、社会民主党陣営に組織されていくクラインガルテン施設が、顕著に増えていったヴァイマル時代に比べ[64]、第二帝制期の社会民主党には、クラインガルテン施設に対して消極的あるいは否定的な意見が強かった。クラインガルテンでの活動に限らないが、労働者の余暇活動全般について、文化的分野での主導権獲得の機会とみるのでなく、むしろ労力の浪費とみる傾向が強く、一九一〇年のザクセン社会民主党の会合においても、社会民主党系労働者が、体操やクラインガルテン設置結社の活動に従事することに対して批判している[65]。また、労働者がガルテンを保有することに関しても、革命への闘争を忘れて体制に安住することにつながるとして危惧する声が強かった[66]。

会員にはほかに、クラインガルテン施設から徒歩で通える範囲に居住しており[67]、子供を持つ者が比較的多い[68]という共通点がみられた。

これらのデータを総合すると、クラインガルテン施設の会員像を一つにしぼりこむことは難しいにせよ、平均的な会員とは、子供が比較的多い労働者家庭の父親で、クラインガルテンを保有する会員はとりわけ、労働者のなかでも賃貸料を払う余裕がある、つまり比較的収入の多い労働者であったであろう。また、クラインガルテンでの植物の栽培やその収穫には同じ敷地で一年、あるいはそれ以上の年月をかけて世話することが必要であることを考慮すると、クラインガルテンを保有する会員は、単に収入が比較的よいだけではなく、比較的安定した就職先で、居住スタイルとしても定着型の人であったと考えるのが妥当であろう[69]。

多数ある余暇活動結社からクラインガルテン施設を運営する結社の会員となることを選んだこれらの人々は、クラインガルテン施設になにを期待したのだろうか。まず、ほかの余暇活動結社では叶えられないクラインガルテン施設の特典である、自分自身のガルテンを保有することを、強く期待していたであろう。ただし会員になってもすぐにクラインガルテンが保有できることはまれであり、会員の半数以上がクラインガルテンを保有していないことも多かった。これらの会員にとっては、ミルク・コロニーや子供祭に代表される子供や家族全体を対象にした福祉活動や様々な余暇活動が、住居の周辺での余暇を楽しむ機会として、大きな意味をもっていたであろう。

つまり、クラインガルテン施設は、クラインガルテンと運動場という複合的なガルテンの一形態であると同時に、都市のそれぞれの地域において、住民の家族的な余暇や健康促進、また生活の充実・向上のための要望を引き受けて、多様な活動の場を提供する場であり、都市の生活文化を反映したひとつの都市文化施設だったといえ

よう。

4. 結びにかえて

本論では、世紀転換期に台頭してきた公共緑地とクラインガルテン施設という新しいガルテンの形を手がかりに、近代ドイツの都市における身近な自然環境との関わりの変化をみてきた。本論の内容を以下、簡単にまとめてみる。

世紀転換期以前のガルテンは、都市の美化に貢献するだけでなく、人々の心身を健康にし、心をなごませる場として神聖視され、社会下層に自力救済の道を開くものとしても期待された。一九世紀半ばごろからはさらに衛生的な見地からも、都市の緑化が奨励された。この結果一八世紀以降、公共緑地や貧民菜園がドイツ各地の都市で設置されていった。しかし一九世紀末において、都市のガルテンには、急速に近代化・工業化する都市で量的に十分なものではなく、また、新たな都市生活様式や多様な社会層の需要に対して決定的に欠落するものがあった。

まず、膠着した伝統的庭園様式を脱していない公共緑地には、青少年や、大都市の過半数以上を占めるようになった労働者などの幅広い都市住民のための運動の場や、ほかの多様な余暇活動をする場としての機能が、十分備わってはいなかった。また、都市に身近な形で存在していた住宅つきの庭や菜園は引き続き減少傾向にあり、自分自身のガルテンを保有し、家族的に余暇を過ごしたいという願望は、満たされずにいた。

これらの新しい需要に応えるため、世紀末から、運動場や多様な余暇活動の可能性を重視する、それまでの形と大きく異なる公共緑地が市当局によって計画されるようになった。また、多様な要望に対する地域的な受け皿として、クラインガルテン施設というガルテンも都市住民自身によって設置された。賃貸によるガルテン保有を可能とし、さらに子供のための運動場や、福祉・余暇活動の場を住居の近くで提供するクラインガルテン施設には、施設は数年で撤去される危険が常にあったにもかかわらず、社会的背景の異なる多くの人々が集まり、世紀転換期には、都市全体で約一二〇施設が存在していた。

このような新しいガルテンの台頭は、都市のガルテンが、都市の生活文化と密接な関わりをもっていただけでなく、都市で広く住民に開かれた多様な活動の場として機能する、ひとつの文化施設そのものにもなっていったことを示している。都市にある自然環境が、望まれて都市に再配置あるいは保存されたとしても、それは単に自然環境を置くことを目的にしてなされたものであったとは限らない。むしろ今回の事例では、都市の二つの大きな需要、物理的な自然環境（ガルテンを含む）の需要と、文化活動の場の需要に、同時に応えることができる施設であることによって、都市で広く住民に支持され、重要な意味をもつようになっていった。

緑地としての側面に焦点をしぼった緑地史や、自然環境としての側面での変化を明らかにする環境史研究にとどまらず、都市の自然環境のなかにある、このような都市の生活に密接に関わる文化施設としての機能を積極的に評価し、都市と自然環境との多面的な関わりについて捉えていくことが、環境史研究を深化させるために不可

欠であり、このシンポジウムが掲げた「人と自然の関係史」の目指すべき方向であるのではないだろうか。

注

(1) 拙著『都市と緑―近代ドイツの緑化文化』山川出版社、二〇〇四年、九〇―九二頁。

(2) 家族が集って憩うことが重視されるようになった背景に、家族の理想像の変化があった。十九世紀はじめより「結婚は精神的、感情的に結ばれた共同体であり、家族は人を社会的文化的存在へと教育する場であるという発想」が生まれ、夫婦とその未婚の子供で構成される家族の親密で閉鎖的な関係がとりわけ重視されるようになった。I・ヴェーバー＝ケラーマン著、鳥光美緒子訳『ドイツの家族―古代ゲルマンから現代』勁草書房、一九九一年、一一三頁。

(3) 拙著、前掲書、一九七―一九八頁。

(4) クラインガルテン施設とは、後で詳述するが、賃貸制小区画園芸用地の集合施設のことである。日本で今日「市民農園」として紹介・注目されているものの主たる原型で、緑地専門用語として分区園と訳されることも多い。しかし日本語で確定した訳語はなく、この時期の施設が、現在の日本で作られているものや目指されているものと、形状においても社会的機能においても大きく異なるため、本論ではこれらを指す一般ドイツ用語をそのまま用い、個々の小区画園芸用地を「クラインガルテン」、その集合施設を「クラインガルテン施設」と呼称することにする。

(5) ドイツの自然環境に関わる近年までの歴史研究動向については以下の文献を参照。Rioddan, Colin, Green Ideas in Germany: A Historical Survey. In: Riordan, Colin (ed.), Green Though in German Culture. Historical and Contemporary Perspectives, Univ. of Wales Press, 1997, pp. 3-41, Uekötter, Frank, Natur- und Landschaftsschutz in Dritten Reich: Ein Literaturbericht. In: Radkau, Joachim / Uekötter, Frank, Naturschutz und Nationalsozialismus, Frankfurt a. M. 2003, S. 447-481.

(6) 一方、このような潮流に対してドイツ史のなかにとどまらず、アメリカやほかのヨーロッパ諸国との比較史的な観点をふまえた問題設定や考察を重視する声もみられる。レッカンは、一九世紀末から二〇世紀はじめにかけて強まった自然保護思想は、ドイツだけでなく西欧全体に発達したものであり、一九二〇年代、三〇年代にドイツで強まる文化的、社会的な問題を人種主義的な見方に結びつけて理解する傾向も、アメリカや西ヨーロッパ全体に戦間期にみられた傾向であったことを強調している。Lekan, Thomas, Imagining the Nation in Nature. Landscape Preservation and German Identity, Cambridge 2003, p. 262.

(7) 緑化政策を地方自治体の社会政策の一端として位置づけた研究書においても、緑化政策についての部分は緑地史（造園史）研究者に委ねるか、あるいはそれらの研究に依拠していた。例えば、Hennebo, Dieter, Öffentlicher Park und Grünplanung als kommunale Aufgabe in Deutschland. In: Blotevogel, Hans Heinrich (Hg.), Kommunale Leistungsverwaltung und Stadtentwicklung vom Vormärz bis zur Weimarer Republik, Köln 1990, S. 169-181, Ladd, Brian, Urban Planning and Civic Order in Germany, 1860-1914, Harvard University Press, pp. 67-73. を参照。

(8) 詳細については、拙著、前掲書、一四―一八頁を参照。

(9) Hennebo, Dieter, 150 Jahre Deutsche Garten-und Landeskultur im Spiegel der Deutschen Gartenbau-Gesellschaft. In: Das Gartenamt（以下、GA と略称する）, 10 / 1972, S. 550, Hojer, Gerhard, München-Maximilianstraße und Maximiliansstil. In: Grote, Ludwig (Hg.), Die deutsche Stadt im 19. Jahrhundert. Stadtplanung und Baugestaltung im industriellen Zeitalter. Studien zur Kunst des neunzehnten Jahr-

hunderts: Bd. 24, München 1974, S. 58.

(10) König, Gudrun M., Eine Kulturgeschichte des Spazierganges: Spuren einer bürgerlichen Praktik 1780–1850, Wien 1996, S. 31–32.

(11) Schmidt, Erika, Stadtparks in Deutschland. Varianten aus der Zeit von 1860 bis 1910. In: Die Gartenkunst 1/1989, S. 105, Schediwy, Robert/ Baltzarek, Franz, Grün in der Großstadt: Geschichte und Zukunft europäischer Parkanlagen unter besonderer Berücksichtigung Wiens, Wien 1982, S. 152.

(12) Stadtarchiv Leipzig（以下、StL と略称する）, Bekanntmachtung, die Allen betreffend, vom Jahre 1811, S. 26, Bekanntmachtung, das Rosenthal betreffend, vom Jahre 1830 und 1835, S. 56, 61.

(13) Stübben, J., Der Städtebau（Handbuch der Architektur, hg. Von Durm, Josef u. a., Vierter Theil, 9. Halb-Band), Darmstadt 1890, S. 487.

(14) Hennebo, Dieter, Der Stadtpark. In: Grote（Hg.), a. a. O., S. 77.

(15) Schreber, Daniel Gottlieb Moritz, Die Jugendspiele in ihrer gesundheitlichen und pädagogischen Bedeutung. In: Die Gartenlaube, 1860, S. 415.

(16) 以下、体操を中心にした運動についての歴史的な扱いの変化についての叙述は次の文献に依拠している。Hennebo, Dieter, Zur Historischen Entwicklung des Sportplatzbaues. In: GA, 2/1978, S. 59–60, Schmidt, a. a. O.

(17) Reulecke, Jürgen, 'Veredelung der Volkserholung'und 'edle Geselligkeit'. Sozialreformerische Bestrebungen zur Gestaltung der arbeitsfreien Zeit im Kaiserreich. In: Huck, Gerhard（Hg.), Sozialgeschichte der Freizeit, Wuppertal 1980, S. 141–160, Lees, Andrew, Cities and Social Reform in Imperial Germany, University of Michigan Press, pp. 191–221.

(18) Böhmert, Victor, Volkspark, eine Lebensfrage für große und kleine Gemeinden, Volkswohl-Schriften, hg. von Victor Böhmert, H. 22, Leipzig 1897, S. 1.

(19) Migge, Leberecht, Gartenkultur des 20. Jahrhunderts, Jena 1913, S. 25.

(20) Vgl. Hennebo, Der Stadtpark, a. a. O., S. 82.

(21) Hirschfeld, Christian Cay Laurenz, Theorie der Gartenkunst, Leipzig 1785（Nachdruck: Berlin 1990), 5. Bd., S. 192–193.

(22) Hoffmann, Alfred, Öffentliches Grün in den Jahrzehnten um 1800. In: GA, 2/1978, S. 378. Gothein, Marie, Luise, A History of Garden Art, vol. 2, 1st published 1928, 2nd printing New York 1979（Original: Geschichte der Gartenkunst, Jena 1914.), p. 301.

(23) Gassner, Geschichtliche Entwicklung und Bedeutung des Kleingartenwesens im Städtebau, S. 19–20, Brando, Kleine Gärten einst und jetzt, S. 12.

(24) 歴史的クライングルテン施設の発達についての研究動向については拙著、前掲書、一一一一三頁を参照。

(25) Stötzner, Auf Leipzigs Schreber-Plätzen. In: Die Gartenlaube, 1883, S. 370.

(26) 特に有名な著作『あらゆる年齢の男女のための医学的室内体操』（一八五五年）は、一九世紀後半から二〇世紀はじめにヨーロッパ各地でベストセラーとなり、日本でも、一八七二年（明治五年）に翻訳されている。（石橋貞彦『シュレーベーの心身に対する教育』山文社、一九八六年。）この本で紹介されている体操は、日本全国に普及した「ラジオ体操」のルーツであるといわれている。

(27) Schreber, a. a. O., 1860.

(28) Richter, Gerhard, Geschichte des Schrebervereins der Westvorstadt zu Leipzig, Leipzig 1914, S. 16–17.

(29)　ベルリンのクラインガルテン施設の発達については次の文献を参照。Rollka, Bodo / Spiess Volker (Hg.), Berliner Laubenpieper, Berlin 1987, S. 26–33, Ingrid, Matthäi, 'Grüne Inseln'in der Großstadt: eine kultursoziologische Studie über das organisierte Kleingartenwesen in Westberlin, Marburg 1989, S. 144–151.

(30)　ライプツィヒ市立文書館の結社に関する文書（Kap. 35）には、結社によって、史料の量も内容もかなり異なるが、結社の規約や年次会計報告書、活動内容、会員に関する文書等、結社の運営形態や活動概要に関連する史料が残されており、今回の主要な史料となっている。

(31)　Stötzner, a. a. O., S. 371.

(32)　StL, Kap. 35 Nr. 295 Bl. 149, 107, 176.

(33)　Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen in ihrer Bedeutung für Stadt und Land. Vorbericht und Verhandlungen der 6. Konferenz der Zentralstelle für Volkswohlfahrt in Danzig vom 18. Juni 1912, Berlin 1913, S. 175, StL, Kap. 35 Nr. 417 Bl. 41, Nr. 377 Bl. 26, Nr. 824, Bl. 2.

(34)　Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen, a. a. O., S. 283.

(35)　Die Einleitung und rationelle Ausnützung eines einfachen Gartens. In: Der Arbeiter- und Schrebergarten, 1913, S. 157–159.

(36)　Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen, a. a. O., S. 164.

(37)　Siegel, R., Die Leipziger Schreberanlage, ihre Entwicklung, Unterhaltung, und Bedeutung. In: Freund der Schrebervereine, 3/1908, S. 54.

(38)　Schilling, Kurt, Das Kleingartenwesen in Sachsen, Leipzig 1924, Beilage.

(39)　StL, Kap. 35 Nr. 993 Bl. 4.

(40)　StL, Kap. 35 Nr. 1055, Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen, a. a. O., S. 176–77.

(41)　Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen, ebd., S. 178–9.

(42)　StL, Kap. 35 Nr. 377.

(43)　Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen, a. a. O., S. 176–183, StL, Kap. 35 Nr. 295 Bl. 104, Nr. 1052.

(44)　Deutsches Museum der Kleingärtnerbewegung, II–43, Bl. 98, 145.

(45)　Der Freund der Schreber-Vereine, 4/1908, S. 33.

(46)　Richter, a. a. O., S. 22–23.

(47)　Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen, a. a. O., S. 168, 184–5.

(48)　ただし、シュレーベー協会に属するすべての施設が、ミルク・コロニーに対して市当局からの助成金を受けているのに対し、他のクラインガルテン施設においては受けていない場合も多い。

(49)　StL, Kap. 35 Nr. 345 Bl. 15.

(50)　Stötzner, a. a. O., S. 372.

(51)　StL, Kap. 35 Nr. 377.

(52)　ゲーアハルト・シュミット著、松尾展成編訳『近代ザクセン国制史』九州大学出版会、一九九五年、七八—七九頁。

(53)　Heidenreich, Frank, Arbeiterkulturbewegung und Sozialdemokratie in Sachsen vor 1933, Weimar 1995, S. 108–9, 110–111.

(54)　StL, Kap. 35 Nr. 377 Bl. 49.

(55)　StL, Oeffentliche Verhandlungen der Stadtverordneten am 2. März 1910, S. 123–6.

(56)　StL, Kap. 26 Nr. 43, Bd. 1, Bl. 10–11, Nr. 40 Bl. 68.

(57)　Familiengärten und andere Kleingärtenbestrebungen, a. a. O., S. 176–183.

(58) Schreberverein-Schrebergärtnerverein-Schrebergärten. In: Leipziger. Tageblatt 5. 7. 1908 Nr. 184.

(59) Richter, H., Die Gartenstadt und die Großstädte. In: Der Freund der Schreber-Vereine, 9/1907, S. 206–7, Unsere Petition bei den Stadtverordneten. In: Der Freund der Schreber-Vereine, 1911, Jan., S. 6–8, Der Freund der Schrebervereine, 9/1913.

(60) StL, Kap. 26 Nr. 129 Bl. 48.

(61) ただし、時期により会員の社会層が変化する結社一つに関しては、便宜上、それぞれの時期に分けて結社数を換算している。例えば、当初は労働者層と中間層が混在していた結社が、ほとんど労働者だけの結社に変化している場合、この結社は、社会層混在型結社としても、労働者層だけの結社としても換算している。

(62) Kap. 35 Nr. 995 Bl. 4, 11, Nr. 1144 Bl. 1–2, Nr. 993 Bl. 2–3, Nr. 1057 Bl. 2, Hundert Jahre Gartenverein Anger-Crottendorf , StL, Kap. 35 Nr. 362 Bl. 9, Nr. 824 Bl. 31, Nr. 824 Bl. 2, Nr. 585 Bl. 2, Nr. 418 Bl. 19, Nr. 396 Bl. 11, Nr. 1053 Bl. 7, Nr. 377 Bl. 54, Nr. 826 Bl. 9, Nr. 992 Bl. 4–5, Nr. 595 Bl. 76, Nr. 414 Bl. 39, Nr. 994 Bl. 2, Nr. 819 Bl. 3, Nr. 1680 Bl. 10, Nr. 1147 Bl. 2, Nr. 345 Bl. 12, Nr. 1799 Bl. 61, Nr. 236, Nr. 779 Bl. 4, Nr. 49 Bl. 85–91. 史料の内容は主に、結社が作成した文書と、市当局が作成したと思われる文書の二種類である。後者は、署名のない「報告」と題した記述である。

(63) E. g. StL, Kap. 35 Nr. 31.

(64) Adam, Thomas, Arbeitermilieu und Arbeiterbewegung in Leipzig 1871–1933, Köln 1999, S. 222, 229.

(65) Heidenreich, a. a. O., S. 52.

(66) Tessin, Wulf, Der Traum vom Garten-ein planerischer Alptraum?: Zur Rolle des Gartens im modernen Städtebau, Frankfurt a. M. 1994, S. 38–40, 51.

(67) Adam, a. a. O., S. 225, 228.

(68) Beitrag zur Statistik. In: Der Freund der Schrebervereine, 11/1913, S. 198, StL, Kap. 35 Nr. 993 Bl. 2–3.

(69) アダムが第二帝制期から一九二〇年代初頭までの主にライプツィヒ東部郊外シューネフェルトのクラインガルテン施設を分析し、出した結論もこれとほぼ同様である。Adam, a. a. O., S. 228.